

京のお茶づけ 桜井光昭

京都で学生生活を送ってきた親類の青年が帰ってきていう。京都でよそのうちに遊びに行く。さあ帰ろうとすると、まあせっかく来たのだから、いっぱいお茶づけでもと引きとめられる。ここが大切なところで、それではお言葉に甘えてなどとすわり直してはいけない。あとで、あの人ははじめて来てお茶づけまで食べていったなどということになりかねない。……と、こんなふうに話していた。かれの体験かどうかはわからないが、これは京のお茶づけといつて有名な風習らしい。

「言語生活」という雑誌の座談会でとり

あげられたこともある。それによると、右のようなケースのほか、ゆっくり話しこんでいると、まあお茶づけでもというケースもあって、このほうは、おまえはもう長くないすぎた、はよう帰れという意志表示だという。したがって、お茶づけをすめられた客のほうも、またこの次呼ばれまっさと言つて帰るのである。出席者の寿岳章子氏は、1プラス1は2だと思つていた若いころはとんでもないことだと思つていたが、このごろは、おたがい、その約束を知りあつている間がらでは、言葉の上の社交を楽しむのも、それはそれでいいではないかと

いう心境になったという意のことを発言されている。

これはまさしく茶の湯と同じである。わたしは、茶の湯のことは実は何も知らないのだが、茶の湯には礼儀作法として一定の手順が定められているという。いわば、その一定の手順による過程を楽しむのだと思う。京のお茶づけも、特定の状況が用意されれば、たちまち一定の手順に従つて、優雅なブレーが展開されるわけである。

茶の湯のほうは、招かれても門外漢は頭をさげればそれですむが、お茶づけのほうはそうばかりはすまされない。気がつかないうちに優雅なブレーにまきこまれて、とんだ失態を演じるかもしれないのである。たまたま被害者となつた、お行儀を知らない、いや事情を知らない関東者があつたとしたら、ひがみたくもなるだろう。

これはじょう談だが、とにかく、はじめ京のお茶づけの話の聞いたとき、すぐ思ひだしたのが「徒然草」百四十一段の「悲田院の堯蓮上人は」で始まる話である。閑東出身の堯蓮上人のところと同じ関東の人

間が来て、都の人間は調子ばかりよくて実がないからだめだ、それに反し、関東の人間は信頼できると言った。上人が答えて言う。いや、そうではない。都の人は人情味があつて心がやさしいから、人に何か頼まれると、そうそうすげなく断ることもできなくて引き受けてしまう。しかし、財力が無いから、不意な結果に終わることが多い。一方、関東の人間は、自分の出身地だけれども、人情味が乏しく、心のやさしさがないから、人に何か頼まれても、できやうもないと思えば、遠慮会釈もなくキツパリ断つてしまう。財力はあるから、実行力もあつて、自然、人には信頼されるのだ。……と、こういった上人の答えを述べたあと、兼好はこの一言を聞いてからは上人を見直したと述べているのは、やはり上人の観察に同感するところがあつたのだろう。

京都は歴史的にきびしい条件を持つてゐる。すでに、源平の争乱に際して、京都はその舞台となつており、兼好の生きていた時代にも北条氏の滅亡から尊氏の政権確立への動乱があつた。あのらつ腕の政治家後

白河院は、表面、平氏を立てながら、平氏追討の院宣をくだし、田舎者木曾が来れば木曾に迎合し、義経が来れば義経と手をにぎり、同時に義経失脚の因をなしながら頼朝とむすぶなど、術策の明け暮れを過ごしている。このような、あしたに平氏を送り、夕べに源氏を迎えるような事態は、後白河院だけのことでなく、京都人全体が、好むと好まざるとに関係なく、遭遇してきているのである。

そのような他国者、侵入者に対して、迎合以外の、あからさまな意志表示は危険なことだつたには違いない。

このように見ると、洗練された社交的手段の一つでもある京のお茶づけの背景には、悲田院の堯蓮上人のような好意的観察までふくめて、長くきびしい歴史的要因とそれに対する京都人の対応が見えてくるのである。

研究室だより I

◇卒業生がたまに研究室を訪れます。ひょっこり一人でみえたり、子供連れだったり二三人いっしょだったり様々です。いずれの時も変らないことは在学当時の想い出話に花が咲くということです。時間のたつのを忘れて、先生方もいつの間にか話の輪に引き込まれてしまうこともあります。

◇もう一年になりますか、土曜日の昼下りの訪問者があります。不定期ですが研究室で、気のあつた卒業生達が近代文学の読書会を行っているからです。勤めの関係からか、時によって人数は異っているようです。読書会はきつと学生時代のゼミナールのような雰囲気か漂っているのではないでしょう。

◇この春、卒業を目前にひかえた学生達が研究室に入ります。この期になると、なんとなく学生の顔もいつもと違って見えるのも不思議なもの。それぞれが二年間をどのように感じたか聞いてみたい気がします。